

序

筆者は、二〇〇二年二月から翌年にかけて一年間、サンパウロ新聞に、ブラジルの日系社会の歴史をテーマとした『我が同胞、百年の水流』を寄稿した。それを二〇〇六年に一冊の書物にして出版した。その時、書名は『百年の水流』と簡素化した。本稿は、その改訂版である。『我が同胞……』を書いたのは、元々は一九九〇年代に起きたコロニアの歴史的大惨事を、一ジャーナリストとして目撃したからである。

なお（日本の読者のために記すのであるが）この「コロニア」という言葉には、明確な定義があるわけではない。「コロニア・ジャポネーザ」の略で、直訳すれば「日本人移民」であるが、実際は「日本人とその子孫が構成するブラジルの日系社会」ていどの軽い意味で、一般に使われている。

戦前は「邦人社会」、改まった場合は「同胞社会」という言葉が使われた。が、一九三〇年代末から「コロニア」が併用され始め、五〇年代に一般化した。理由は改

めて——その時代に関する章の中で——説明するが、本稿では、適宜、使い分け、総称する場合は、日本からの進出企業も含めて「日系社会」と表現する。

歴史的大惨事とは、それが表面化した順序に従って記すと、コチア産業組合の瓦解、スール・ブラジル農業協同組合の解散、南米銀行の身売りのことである。（産業組合＝農業協同組合）

この二組合一銀行は、戦前から長い歳月をかけて、邦人社会そしてコロニアが造り上げた城であった。外部に對しては誇りであり、内部に於いては経済的、社会的、精神的な拠り所であった。それが、二十世紀末の数年の間に、相次いで落城してしまった。予兆らしい予兆もなく、突如……。

コロニアは、その何れについても、初めは信じられず、事実として受け入れるまでに、かなりの時間を要した。

しかも、ほかに、これに代る城は存在しなかった。

その歴史上、空前の大惨事であり、例えば日本史に於ける「昭和二十年八月十五日」に匹敵した。

「コロニアも終りだす……」

という嘆息が、そこかしこで聞かれた。

落城の結果、日本への出稼ぎが大量に発生した。それは落人の群れを連想させた。

国破る……とは、まさに、このことであろう。ある年代以上の人々の場合、生涯に二度、同じ苦汁を吞まされたことになる。無論、一度目は日本の敗戦である。（またか！）と、心中堪え難い思いであつたろう。

ここで不都合千万だったのは、この二組合一銀行の瓦解、解散、身売りに関し「何故、そうなったのか？」の詳細・的確な事情説明が、それぞれの経営陣から、なされなかったことである。若干はされたが、得心の行くものではなかった。

もつとも、落城などという現象は、多くは、そういう乱れた幕の降ろし方をするものなのであろうが……。

事情説明がされないため、筆者は「何故？」にこだわ……気がついたときは、一人で、それを追究し始めていた。何か、自分の意志以外の力（例えば天意といった様なもの）に惹かれて、そうなった気もする。

その初期の段階で、奇妙なことに気づいた。というのは、この三つの城は、一九二〇年代の数年の間に生まれ

（南銀の場合は、その母体となったブラジル拓殖組合が創立され、一九二〇年代、やはり数年の間に最期を迎えているのである。）

この、時期的な符合の意味するものは、何なのだろうか？

その疑問に囚われたこともあり、「何故？」の解答を求める作業に、のめり込んでしまった。

しかし、その作業は易しくはなかった。のめり込めばのめり込むほど「これは、ここは、どうして、こうなのか？」といった類いの疑問が次から次へと、湧き出してくるのである。それを解こうとすると、そこから数年、数十年の歴史を溯って洗い直さねば、答えが出ない。仕方がないので、そうしていると、その答えに関連して、また新たな疑問が……という具合で、思考の筋道は錯綜に錯綜を重ねる。イヤその苦しさ！

そうこうする内に、いつの間にか「笠戸丸」にまで辿りついていた。

笠戸丸は一九〇八（明治四十一）年六月十八日、初の日本移民を乗せてサントスに入港している。普通、この日が、この国に於ける日本人とその子孫の、歴史の始まりとされる。

追究作業が楽になったのは、その笠戸丸に辿りついてからである。以後、今度は逆に、つまり歴史の水流を川上から川下に流れ下ってみると、数々の疑問が消えて行つた。これは、まことに妙であつた。

もつとも、人が何かといえ、歴史を渉猟するのは、そういう効果があるからであらう。

日系社会の歴史が見えてきた。二組合一銀行が何故、同時期に生まれ、興隆し……そして一転、同時期に最期を迎えたのかが見えてきた。

他に、作業中、気づいたのは、この歴史の内容が結構面白いという事実である。面白い……と言つてはナンだが、実に味わい深いのである。無数の新発見があつたことにもよるが、ドラマ性が豊かなせいであらう。

考えてみれば、百年の歳月が積み重なつており、戦前・戦後で二十四万人もの日本人が、この国に“民族移動”したのであるから、そうあつてこそ当然なのだが……。

教えられたこともある。

その歴史は、幾度も危機に見舞われており、中断、断絶に瀕する局面もあつた。が、先人たちは、それを切り

抜けて歩み続けてきた……というよりも、歴史というものは、そういうことの繰返しなのだ、と。

先人たちは、感嘆すべき氣組、氣骨を武器に、歴史をつくつてきたのだ、と。

これを知る者に愛着を覚えさせてくれる。これを学ぶ者を覚醒させてくれる。覚醒する者に新たな活力と知恵を与えてくれる。

そういう意味では、歴史は先人が残した偉大な遺産である。しかも、これは日系社会が共有する遺産である。これまでは、その歴史の水流を源から川下まで、流れに沿つて水中・水底まで透視して、描写した資料が無かつたため、誰も、その存在を知らなかつた——だけのことである。

しかも、こうした精神的遺産は、形が見えないだけに、その価値は看過されがちである。もし銀行預金や不動産が遺されていれば、人は、それを相続するために、血眼になるであらうが……。

我々は、コチア、スール、南銀を失つた後、先人が残した共有の遺産は、この「歴史」しかないことを悟るべきである。

思うに、この国に於ける日本人とその子孫の百年は、日本民族の歴史という大河の一支流のようなものであつた。ほかの民族の場合も同様である。

その多数の民族が、その支流の水を混濁させつつ、長い歳月をかけて、新たな民族と社会を形成してきたのが、ブラジルという国なのであらう。

ともあれ、筆者がのめり込んだ追究作業は、結果的に二組合一銀行だけでなく、それを含め、この国に於ける日系社会の百年の歴史を対象としたものとなつた。

もつとも、笠戸丸以前にも、さらに、その百余年前から、僅かながら日本人の足跡が印されていた。それは「前史」ともいふべき内容であつた。

作業に、ひと区切りつけた時には「何故？」の答えを求め始めてから、ほぼ十年が過ぎていた。

その結果を世に報告したいと思ひ、前記の様に、サンパウロ新聞に寄稿したところ、幸い好評であつたため、さらに数年をかけて内容を充実、出版に踏み切つた。

しかし、この国では、日本語を読む人口が急減、書籍の流通ルートも無くなつており、この点が問題であつた。

が、幸い多くの方々のご協力が得られ、本は間もなく品切れとなり、翌年十月まで、さらに三回増刷した。

次いで、その読者のお勧めと日本の国際交流基金や有志の方々のご支援により、ポルトガル語版の出版も実現した。

以後、数年が過ぎた。この間、親切な方々から新しい資料を提供いただいたり、自分で発見したりし、記事の大幅補筆の必要を感じるようになった。

一方、日本語版の在庫は底をついたが、なお入手希望の方が居られることが判つた。

これを知つた篤志家の続木善夫氏が、この改訂版の発行を引き受けて下さつた。

筆者としては、所期の目的を超える展開であり、ここに至るまで力を貸してくださつた各位に、深く感謝しかつ、この拙稿が読者のために、多少でも役立ってくれることを祈っている。

二〇一二年七月末日